1989年11月1日発行　(財)高知市文化振興事業団

文化高知 32

都市と文化と街路樹と

中内　光昭

いまさら言うまでもなく、「文化」は直接目で見ることはできない。でも、見知らぬ土地を訪れた時、何となく「文化」の香りや「伝統」の奥床しさを感じる町と、開拓時代の「西部」を連想させる町とがあるのはなぜだろうか。少なくとも私は、しらずしらずのうちに、町の〝緑〟と〝流れ〟から「文化」を感じ取っているらしい。つまり、家々の庭木や街路樹がどれだけ伸び伸び育っているか、川の流れや岸辺がどれほど大切にされているか、というようなことを肌で感じて、その町の「文化度」を計っているようである。

水の話は別の機会にゆずり、ここでは街路樹について考えてみたい。我が国の、特に地方都市で街路樹が貧弱であるのは道路事情や交通事情による面も大きいが、より大きい原因は、住民や行政担当者のものの考え方にあるように思われる。「枯れ葉が落ちるから枝を切る」「交通信号が見えないから枝を切る」などという理屈が白昼堂々とまかり通るのは寂しい限りである。落ちた枯れ葉は住民や行政が掃除し、枝が邪魔なら、信号機の腕を伸ばすのが、「文化国家」の取るべき対応であろう。

ところで、高知県の街路樹を考える場合、台風対策を無視するわけにいかない。従って、高知のようなところでは、毎年枝が無残に切られるのもやむを得ないとなかば諦めていた私が、強烈なショックを受けたのは、先年初めて鹿児島を訪れた時である。西郷どんや、いも焼酎から連想するイメージとはおよそ不釣り合いな、しゃれた、バタ臭い印象をこの街から受けたのは、姉妹都市にちなんでナポリ通りなどという通りがあったからではなく、高台の通りの見事なばかりの緑のトンネルや、気持ちよく枝を伸ばした大通りの並木からである。

高知以上に台風の災害を受けている鹿児島でこのように樹々を大切にするためには、恐らく行政も市民もそれなりの犠牲を払っているに違いない。それまでしてでも緑を大切にする気持ちこそ文化そのものであり、はっきり言って、〝鹿児島に負けた〟と思った。鹿児島に追いつくまで、高知の「文化度」をあげるためには、これからかなりの努力が要求されよう。教育の一端を担う者として、今までの無力を恥じ、今後、機会を見て学生たちともこのような問題で話し合いたいと思っているこの頃である。

「コスモス」並村菊子

（高知大学長）

大連・東京そして高知

吉田　満穂

人間は自由に生きていると思っている。しかしこの私が日本人であること、男として生まれたということは神の定められたことであって自分で選ぶ自由はない。ただ生涯をどこで暮らすかということについては、半ば自分に選択が許されていると言えよう。

私は清岡卓行氏の「あかしやの大連」で知られる旧満州の大連でほぼ二〇年、その後の一〇年足らずを東京で、そして生涯の大部分に当たる四〇年を高知で過ごして七一才の今日を迎えている。私の生涯を三分するこの三つの土地については、それぞれにあたたかい思い出というだけでなく、自分の人間形成の上に色濃く影が落とされていると言えそうである。

先ず大連。この自由な空気に満ちた植民都市は、そこで生まれ育っただけに私にとってはなつかしさ一入である。日本式の義理人情にはいささか欠けるが、そこには明るい自由さと共に一種のバイタリティが生動していた。先年逝去されたわれらの市長坂本昭さん（私の中学の先輩）がその代表と言えようか。大連生まれのわれわれには故郷がない。そのためか全国各地に散って生きてきたわれわれには「大連」という一つのきずながいつまでも生き続けている。

私の住んでいた地域は市街地から少し離れた一劃をなしていたが、そこで少年少女時代を過ごした仲間たちは今も「星カ浦会」という名で年一回の集いを持っている。

東京は故郷という名には馴染まない。よそ者であるわれわれにとっては、しばらくの宿りというに過ぎないからであろう。ただここでの一〇年に足りない年月は、首都の目でものを見ることを教えてくれたと思う。首都といっても昭和一〇年代の東京は、今日摩天楼の群居する新宿の西口が、遠くに淀橋浄水場と精華女学校の校舎が見えるのみで一面の荒地だったし、池袋の駅前も立教大学と豊島師範の建物の他は青々とした麦畑で雲雀が鳴いていた。

そして高知である。高知は決してスマートな町ではない。この四〇年、わが愛する高知の町も他に後れじと近代化への努力を続けてきた。しかし高知の「よさ」はそのようなお化粧によって造り出されるのではない。むしろ生地のままの土臭さにえも言われぬ味わいがあるのであろう。県外から高知に移り住んで先ず感じられたのは、決して背伸びをしようとしない土佐人の面だましいであった。地に足がしっかりと着いているのである。私のように植民地、東京と、言わば異邦人の町をしか知らなかった者には、高知に来てはじめて日本というものにじかに触れた思いがしたものである。アメリカの町々をバスで走ってみると、どの町も皆同じ顔にしか見えない。勿論ボストンを中心としたニューイングランドの辺りには古い西欧の香りが、南のニューオリンズの町にはフランスの風物が残されてはいるが、しかしヨーロッパに行ってみてはじめて、成程ここがほんものだったのだなと納得するのにやや似ている。

土佐は日本の中央からは遠かった。今でこそ東京まで空路僅かに一時間二〇分、日帰りで用の足せる距離になったが、昭和のはじめまでは表日本には汽車も通ぜず、船で行く大阪が一番近かった。このような環境の中で土佐は独自の文化をつくり上げて来たと言えよう。

自分の足で立ち、自分の足で歩く。人の評判を気にしない。要領よく立ち回って得をするよりも、自分で納得する道を選んで損ばかりしている。こんな生き方は今どき流行らない。しかし私のような薄手な人間は、そこに土佐人の重量感を感じて羨ましかったのである。

昨年の秋はお城の紅葉が近年になく見事であった。また春の若葉の色も、これが最後と思うと心に滲みる美しさであった。今眼をつぶるとその高知が眼に浮かぶ。なつかしい限りである。

（元高知教会牧師・我孫子市在住）

高知とマンガ

青柳　裕介

高知県を漫画王国という。私自身も漫画は高知県の地場産業だと言いつづけてきた。

なぜ、こんなに漫画家が多く輩出されるのか。私は、それは土佐人に脈々と受け継がれた反骨心だと思う。で、ここで、私流の物の見方を披露してみようと思う。

①　犯罪について

先日ある週刊誌から私の所へ「今年の凶悪犯罪発生率No1が土佐ですが、どう思われますか」という電話がかかってきた。私は即座に「それはいい事だ、めでたい」と答えた。答えた後、さあ何がめでたいか理由を考えねばならぬ。土佐人というのは、人に何か尋ねられると、まず何か答える。そして、答えた後その答えに理由を無理矢理ひっつけるのである。私は記者に聞いた。「凶悪犯罪とは何ですか」と。相手は答えた。「殺人事件です」と。なるほどそれでわかった。ヤクザさんはドンパチやるし、なにせ土佐は燃えあがり者の多い土地柄である。なるほど理由がわかれば後は簡単である。相手は尋ねてきた。「凶悪犯罪No1はめでたい事なのですか」私は堂々と答えた。「そうだ」土佐人は人間的なんだ。殺人事件といってもロリコンの誰かさんみたいな陰険な計画的犯行ではないはずだ。飲み屋で一杯ひっかけていて、口論になりカッとなって刺したとかそういう事件のはずだ。土佐人は十人集まれば十の政党ができると言われるほど口論好きなのである。そういう結果の殺人事件という事となれば、それは土佐人が純粋だという証拠ではないか。今の世の中、変に賢くなりすぎて当たらず障らずの人間が多くなった。そして、いじめに代表されるように、人間がだんだん陰険になっていく中で土佐人は堂々と自分の主張を述べ戦う。なんと誇らしい事か。相手の記者は「ハアそうですか、どうもありがとうございました。」と、不思議な言葉を聞いたかのように電話を切った。やった。無理が通れば道理が死ぬる。今や日本人の中で人間らしさが残っているのは土佐人だけかもしれない。その証拠は色々ある。例えば離婚率No1、飲酒運転検挙率No1等、数々のワースト記録に土佐は顔を出す。私は、これは素晴らしい事ではないかと思う。なぜなら、今や世は管理時代。何でもかんでもワクにはめられ、お上に都合の悪い事は切り捨てられ葬り去られていく世の流れの中で、懸命に自己主張している証拠ではないか。人間性が豊かだからこそ土佐人はワースト記録に次々に顔を出すのだ。

②　酒について

土佐は酒国である。桜が咲いたと言って飲み、散ったと言って飲む。あげくに葉桜になったと言って飲む。とにかく理由はなんでもいいのである。ワイワイ集まって飲むのが好きなのである。宴会の場に行けば、土佐人が一発でわかる。まず、酒ぐせの悪い奴がいる。もうあいつは呼ぶな。あいつは場を野にする。いいな、今度飲む時はあいつは絶対呼ぶなと言っておいて次に飲む時、おかしいな、何か場に足らんものがあるぞ。そうじゃあの悪が来てないおかしいのう、酒の匂いのわからん奴じゃないはずじゃ。病気じゃないか、ちょっと見てきてやれという事になり、なんの事はない。呼びに行って一緒に飲む事になるのである。それに土佐には酒の席での事じゃ少々の事は許したれというおおらかな気風がある。東京辺りで飲んで暴れ、卓台でもひっくりかえそうものならその人間は爪弾きにされ人間失格のように扱われるのではあるまいか。土佐はよい国である。

以上

どうでした。おもしろかったですか。それとも下らん独断とおおもいでしたか。

逆も真なり、これが漫画家を生む発想です。

（マンガ家・香美郡土佐山田町在住）

うるしの心を塗る

高知県伝統工芸「土佐古代塗り」

池田　八郎

〈漆の特性〉

梅雨期など雨が降り続くと「毎日の雨で仕事にお困りでしょう」と挨拶されることがよくある。

「いいえ、雨で仕事がはかどりますよ」と答えると怪訝な顔をされる。

漆が乾くには湿度が80％以上必要で、晴天や冬の乾期には常温、常湿ではほとんど乾かず、高温多湿の夏にはよく乾くのです。

化学塗料の多くが溶剤が蒸発して乾くのと違い、漆の成分と湿気中の酸素が化合して乾く、というよりは正確には乾固するのです。このため漆を乾かすには、湿気を必要量保持出来るように作られた箱、又は小部屋に入れて乾かします。

こうして一旦乾固するとアルコール、酸、アルカリ等いかなるものにも溶けず、侵されることがありません。完全乾固した漆の固さはガラス一〇〇に対し八〇と伺っています。

人間国宝松田権六氏の記述によれば、大正五年朝鮮の楽浪遺跡から二千年前の漆器が河床の泥中から発掘され、器胎の木部は腐っていたが漆の塗面はそのままであり、漆膜の変質の度合いについて化学的、物理的に種々の検査を行ったが、最近に塗られたものと比べて、色や強度に於いてほとんど変わりがなかった、とあります。

ここまで読まれて、ハテナと疑問を抱かれる方もあられると思われます。漆器はキズがつきやすい、壊れやすいとハレ物に触るように大事に扱うものだ、との考えが普遍的だからです。

〈弱い漆器の正体〉

漆は漆の木から採取した樹液です。この液汁を用途別に幾十種類にも加工して漆業者が販売しているわけですが、価格の低簾なものには増量剤が適量以上に混入されていたりして、塗面の強度が弱くなっているのも事実です。他にも器胎の木地からはじまって問題点は種々あるのですが、弱い漆器の最たる原因の一つに漆の使用量の簡略があります。

例えば下地の場合、漆の代用には柿渋、膠、洋塗料、甚だしきは糊ばかりというものまであり、漆を使ったものでも多量の米糊を混合したものもあります。近時は洋下地が全国産地の主流となっているようです。

〈土佐古代塗の誕生〉

古代塗は江戸末期か明治の初め頃、佐川の種田豊水と言う人が創始され、幾多の変遷や改良を経て今日に至っております。

高知市を主市場として県下一円の愛好者に根強いご支援を頂いています。その理由として、頻度に日常使用しても丈夫である、渋さと品の良さ、手作りの温かさ等あげてくださるのです。が、何だかこの頃古代塗が弱くなったと言われたこともありました。

そこで、弱い漆器の原因を究明し、高知県人の誇りである日本最強の古代塗を作り、本県伝統工芸として恥ずかしくないものをとの願いから私はこの道に入ったのです。

古代塗の特徴は幾つかありますが一般的にザラザラとした鮫肌塗面にあると思われています。この鮫肌を作るには、ヘラ引きと蒔地の二通りがあり、従来の古代塗は伝統的に大部分の製品がヘラ引工法です。この工法は地の粉、米糊、漆又はカシューを練り合わせたものをヘラで引塗し鮫肌を作る。混合する三品のうち糊の占める割合は約40％で、古代塗が弱いと言われている原因の一つです。

私の土佐古代塗は蒔地法で作ります。黒中漆（水分を抜いて粘っこくした漆）を肉厚に塗り、乾かない塗り面に地の粉を蒔く。一日かかって漆が乾くまでに地の粉が漆をたっぷりと吸い上げて十倍位にふくれ、漆の固まりの鮫肌の下地が出来る。この鮫肌は堅くて強い。いかに切れ味のよい紙やすり、砥石でこすっても完全にすり除くことは不可能に近い。

これは私の土佐古代塗製作の一工程を述べたに過ぎませんが、全般にわたり、工人の良心を塗り込めてあると自負しています。

伝統工芸品は生活用具であることが基本です。日常の使用に十分に堪え得るものでなければなりません。

飾り物なら良いが、使用すると剝げた、壊れたでは困ります。需要家の皆様に私の製作した古代塗は偽物、紛い物でない本物漆器であるとのご認識を頂くために、古代塗に「土佐」を冠し「土佐古代塗」と名付けたのです。

ご愛用下さらんことを願い上げます。

（土佐古代塗　美祿堂　漆芸家）

「至るところに見受けられる新見・創見に目を奪われました。殊に従来部分的に土佐方言を援用しての論があったのを、多年のご研究に基づき体系的な根拠からのご考察で見直された点に、心から敬意を表します。学界のため慶賀すべき名著と存じます。」

（松村誠一・成蹊大学名誉教授）

「貫之の本文も名文なれど土居先生の文、すみずみまで明晰で、読み下していて清流を下る思いがしました。さすがに国語学者で、論理的に迷うところなし。そこに土佐方言のよき解釈がまじえられて風緻豊かなり。諸説を丹念に吟味しておられて、信頼して読めます。」

（中田祝夫・筑波大学名誉教授）

新見・創見に目を奪われる

土居重俊著

土佐日記

付方言土佐日記全訳注

「大変よい企画に驚嘆し、『土佐日記』研究のために今後重要な役割を果たす書物として欠かせないものになるのではないでしょうか。国文の研究者に方言を敬遠しがちな傾向があるとしたら、御著によって愁眉を開くべきと思います。方言研究のためにも国文学研究のためにも深く喜んでやみません。」

（山口幸洋・静岡大学講師）

「方言訳の方を読んでいますと、なんともいえぬ味がありまして、引用の助詞〔と〕抜きの語りがなつかしさを覚えさせます。しかし、考えてみますと古典をこういう視点からみるという発想はこれまでなかったものですから、とても新鮮な感じがします。この方言訳は、時がたつにつれて次第に光を放ってくるものと存じます。」

（内間直仁・千葉大学教授）

「前人未踏ともいうべき古典全巻の方言訳に接し、言い知れぬ感懐を覚えました。ただ頭がさがるばかりでございます。」

（日野資純・静岡大学名誉教授）

「方言訳土佐日記はおもしろい発想で、正に〝土居版現代土佐日記〟というべきものです。『なぐひ』の方言による解釈はピカ一と思いました。」

（柴田武・元東京大学教授）

「土佐弁訳がついているところはユニークなご工夫と感服しました。方言の教科書として使えるのではないかと思います。」

（国立国語研究所）

ナマステ・ネパール 2

生け贄とロキシー

浜田 康

三月二十四日土曜日、ネパールに来てすでに一カ月近くなるが一滴の雨も降らない。空気の乾燥がひどく日中気温が上がった時には湿度が20%を切ることもたびたびである。仕事中水牛のミルク入りの紅茶を何杯も飲んで喉の渇きを潤すが、便所にはめったに行く必要がない。乾燥がひどいので体がいつもさらさらとして気持ちが良い。

この乾燥のためか昆虫の姿が非常に少なく趣味の昆虫採集ができない。月末の土曜の休日をどんなに過ごしたものかと考えているとシャンカー君から時間が空いているならダッシンカリーの寺に案内しようと電話があった。

彼の話によると、この寺はカトマンズ盆地から流れ出るバクマチ川に添って20キロ余り南に行った小さな支流のほとりにあり、有名な生け贄寺で、土曜日は多くの参拝客で賑わうそうである。

生け贄を神に捧げる習慣は、我々から見ると非常に珍しいので早速出掛けることにした。

日本の川の辺というと清流を想像する。万年雪をいただくヒマラヤ山脈から流れ出る川は水がきれいで豊富だろうとよく問われるが、私の見たネパールの川はどれも黄色に濁っていた。急流が川底を浸食して多量の土砂を流しているのだろう。それでも人々は平気で水浴したり、飲料水に使用している。その上この国には水葬の習慣もあるので、ちょっと口にする気にはなれない。たまに清流を見つけてもうっかり飲むと、多量のマグネシウムを含んでおり下痢を起こす。バクマチ川は人口の多いカトマンズ盆地を貫流して来た川であるから特に汚れはひどい。ここでは人が亡くなると川の辺で火葬にしてそのまま灰を川に流す。金持ちであれば薪を十分使うが、貧しい人達は薪を沢山使えないので少々の事は辛抱して流すことになる。乾期の川は特に汚れがひどくなる。

寺への途中でネパールでの生け贄の習慣について聞くと、この国の人達は、動物を生け贄にしてその血を神に捧げると過去の罪はすべて償われると信じられているそうだ。それには水牛の子牛が一番良いが高価で一般には手が出ないので小動物で代わりをしていると教えてくれた。又、昔は大きな建物などを造る時、奇数年の男の子が生け贄にされていたそうで、今でも子ども達が生け贄にされていた場所が残っていると聞かされた。

話を聞きながら一〇時過ぎ寺に着くと、既に付近は多くの参拝客で賑わっていた。寺の近くの道の両脇には店が立ち並び、参拝に来た人達がその店をひやかしながら歩いている様子は日本の縁日の風景に似ている。ただその人達は生け贄にするニワトリ、アヒル、首に縄付けた山羊などを手にしている。その動物達がすべて雄であるので不思議に思って尋ねると、ここの神様は女神だと返事が返って来た。

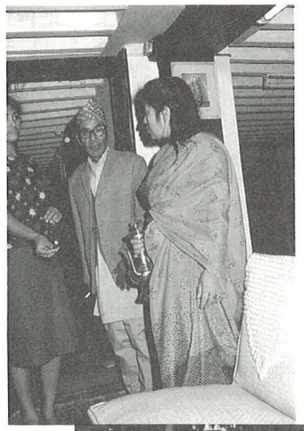
人波を分けて谷底の寺に降りていくと、寺の近くでは既に参拝を済ませた人が首を切った血のたれる動物を手にしており、うっかりするとその血糊で足をすべらす。寺は有名な

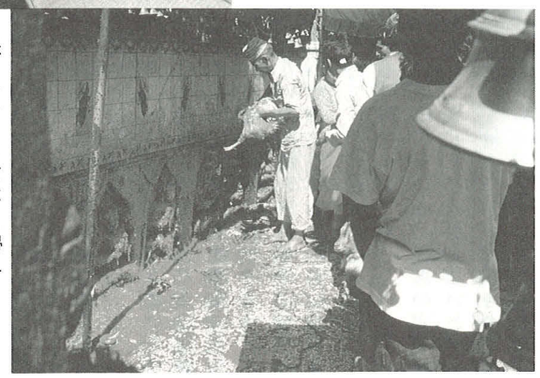
子どもが生け贄にされた森　今は立入禁止

割合には小さく、ヒンズー教特有のけばけばしい色で塗られた建物である。多くの外国人観光客も来ていたが、外国人は中には入れないので鉄格子の間から中の様子を覗くと、二、三人の首切り人が居て差し出される動物の首を次々と切っている。付近は壁も床も血が飛び散り朱色のペンキで塗り潰したようになっている。神に捧げた動物は、谷川の水辺で解体して家に持ち帰って行く。

神に動物を供えることは、経済的には負担になるがこんなことがなければなかなか蛋白質が口に入らない人達も沢山いると言う。神の前で平気で動物の首を切る人達を見ると、いかにも残忍に見えるが、自然に沢山いる野鳥を採るのを見た事もなければ、ハエなども追うだけで叩くところを見た事もない。彼らは必要以上に生き物を殺す事をしない。

寺からの帰りシャンカー君の家で夕食を御馳走になった。ネパールでは食前の酒はロキシーである。この酒は日本酒と同根のものだといわれ米と稗で作る。両者の割合は家によって異なるが米が多くなるほど味が良い。

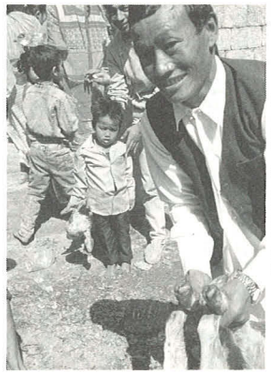




上、ロキシーを手にする婦人
右、ダッシンカリー生け贄寺の首切り場

ネパールでは床の上にあぐらをかいて食事をするので、出された盃を前に置いておくとロキシーを注いでくれる。酒を注ぐのは主婦の役目らしく、細い口の付いたロキシー入れから盃に注ぐがその様子が実に面白い。

最初は盃のすぐ上からロキシーを注ぎはじめ盃に入りはじめるとロキシー入れを急に高く持ち上げて行く、終りには盃と80㎝位離し上から徐々に落とす。ロキシーは小さな紐位になり正確に盃の中に落ち込む。その時、ロキシーは盃の中で盛んに泡立つ、良いロキシー程この泡が沢山立つそうで、要はどれだけ泡が出来るか客に見せるためである。泡は一瞬盃の上に盛り上がった様になるが、頃合を見て急にロキシーをそそぐことを止める。その時決して外に溢れることなく、最後は糸を引いた様にうまく直径五㎝位の盃の中に収まる。



生け贄を手に持つ親子

この注ぎ方は熟練を要するらしく、主婦は相当の練習を積むと聞かされた。ただし、この様な事をするのはかなりハイカーストの家庭だけである。普通はコップに入れてそのまま出て来る。

沖縄の酒である泡盛りと、ロキシーの泡と何か共通性がありそうな気がした。香りも非常に似通っている。

ネパールで、ロキシーのつまみには蒸し米を潰して乾かしたチューラが必ず出て来る。最初蒸し米を潰すとお互いがくっつき合うのでどの様にして作るのか不思議に思ったが、籾を被っているうちに蒸してそのまま潰して干し、その後籾を取り除いて作るそうである。何の味付けもしていないが、噛むと次第に甘くなって来る。

チューラをぽりぽりとかじりながら、ロキシーをちびりちびりと飲むわけであるが、仲々強い酒でアルコール分はウイスキーより少し強い程度である。日本のように盃の交換はないが、盃を前に置いておくと中味が減っていればいくらでも注いで来る。しかし、一度断わると決して後は勧めない。ただし「この酒は二日酔いをしないからいくら飲んでも大丈夫ですよ」と言って勧めては来る。つい言葉につられてしたたか飲んで帰ったが、翌朝はすっきりしていた。

門前市

（高知県紙業試験場専門研究員）

(注)ナマステとは〝コンニチワ〟〝サヨナラ〟等人との出会い、別れの時に使う日常語。

心のおしゃれ

谷沿正子

社会生活を送るのに何が大切かと言えば、それは、人間関係だと思います。人間関係さえうまくいけば、どんなにむずかしい仕事でも、きつい労働力を要する事でも、苦しみは半減すると思います。

マナーは、人とのおつきあいを円滑にする潤滑油です。どんなに精密で高度な機械も、潤滑油がないときしみがでて動かないように、マナーはお互いの関係を快いものにしていく上で欠くことができません。

そして、その自分の心を形にして伝えるのがマナーです。しかし、どんなに素晴らしい心、感謝の心を持っていても、形に表現しないと相手に伝わりません。形が重視されるのはこのためで、昔のしきたりを押しつけるためではありません。

形には、言葉と動作があります。例えば「ありがとうございます」という言葉と、頭を下げる動作で表現して、初めて相手に自分の心が伝わるのです。日本の礼儀作法の原点は、頭を下げる動作です。従って、日本人の挨拶は礼をします。まず相手を見て声をかけ、言葉の終わり頃頭を下げていき、後でもう一度相手を見ます。挨拶ひとつでその人の性格や、その時の心理状態がわかると言われます。感じのよい挨拶は、相手によい印象を与えます。

時、場所、相手に合わせての対応も大切です。いつも丁寧にゆっくりとすれば、マナーにかなっているとは言えません。マナーは特定の人や、特定の場所にのみあるものではなく、日常生活の中にも、改まった場所にも、そこにふさわしいマナーがあります。それを私達は、眞・行・草という言葉で表現します。

眞は、非常に丁寧な考え方・動き
行は、やや丁寧な考え方・動き
草は、気軽な考え方・動き
です。

眞の場所（儀式）へ出席すれば、服装、言葉、動作、すべてが眞の場所にふさわしいものでなければいけません。また、日常生活の草の場合で、自分一人丁寧すぎれば、堅苦しさを与えてしまいます。その場に応じた的確な判断が必要です。

マナーは時代と共に変化していきます。時代の流れに従って、人の考えも、生活様式も変化していくので、その時代にふさわしいマナーが要求されます。ただ、その場合、何も彼も変わるというのではなく、日本の美しい伝統を継承しながら、その時代にふさわしいマナーを、身につけていきたいものです。

いまひとつ、自分さえ恥をかかなければよいというのではなく、相手にも恥をかかせない、そうしたおもいやりの心が大切です。

ある時、二時間の講義を終えると担当の方が「コーヒーでもいかがですか」と声をかけて下さいました。私は「お茶で結構です」と申し上げたところ事務室に案内され、若い職員が一杯のお茶を出して下さいました。早速、頂こうと手を伸ばしたところ、熱くて持てないのです。少し待って口に運びましたが、やはり熱くて飲めません。飲みたいのですが飲めないのです。帰りの都合もあり、悪いとは思いましたが折角出して下さったお茶を置いたまま「御馳走さまでした」と言って席を立ちました。見せるためのお茶でなく、飲むためのお茶であったと思います。飲めるお茶を出さなければ、意味がないと思います。

現在、ロボットも進んで高度な動きをするようになりました。ロボットでもお茶を運ぶ事はできますが、心がありません。人間の素晴らしさは、心がある事ではないでしょうか。ただ事務的にお茶を出す人、温かい心をこめて、相手の事を考えてお茶を出す人、あなたは、そのどちらでしょうか。ロボットでなく、心のある人間でありたいものです。

マナーは心のおしゃれです。

（全日本作法会　本部講師）

秋深まれば ヒメイチ料理

関田　和子

秋、土佐湾で底曳漁がはじまると、魚屋の店先に華麗な体色のヒメイチを見かけるようになる。

ヒメイチの本名は、ヒメジ（比賣地）。沿岸の砂泥底に群れをつくって生息する体長15センチほどの小魚で、本州中部以南に分布する。

ヒメイチの旬は、晩秋から冬。癖のない上品な味の魚で、塩焼き、天ぷらや煮つけなどにする。もとは赤ものでも大衆魚だったが、漁獲量の減った現在は高級魚扱いされている。もっとも県外ではあまり賞味されないようで、ほとんどカマボコの原料になっているらしい。

ヒメイチの代表的な郷土料理といえば、姿ずしと辛子煮であろう。いずれも昔から高知平野で作られていたもので、ヒメイチの姿ずしは神祭のときの皿鉢にサバの姿ずしとともに加わって、小さくても赤ものの風格があった。

ヒメイチの姿ずし

材料　ヒメイチ（大）4尾・塩・米酢・柚子酢・すし飯2カップ（すし飯の割合は米5合に酢90c.c.・塩大さじ1・砂糖1／2カップ。）・炒りゴマ・みじん切り生姜少々。

作り方

①新鮮で形のくずれていない魚体を選び、ウロコをとり、背から包丁を入れて内臓、エラ、中骨を取る。

②やや多めの塩を振り2時間位おく。

③水洗いして、米酢と柚子酢を合わせた酢に1時間位浸す。

④ヒメイチの背からすし飯（ゴマ・生姜を混ぜたもの）を詰め、腹を上にして形を整え、適当な大きさに切る。

ヒメイチ漁の最盛期には少し小さい魚体のものが安く出廻る。頭も骨も食べる辛子煮には、少々面倒だが小さなヒメイチほど良い。但し、内臓も利用するので新鮮なものに限る。

ヒメイチの辛子煮

材料　ヒメイチ（小）800g・酢大さじ3・唐辛子3本・しょうゆ70c.c.・酒50c.c.・砂糖60c.c.・みりん30c.c.。

作り方

①ヒメイチのうろこ、ひれ、えらを取る。

②鍋にヒメイチを入れ、ひたひたの水と酢、唐辛子を加えて、コトコト気長く煮る。

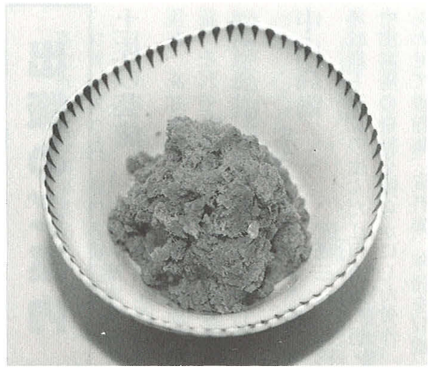
③骨が柔らかくなったら、しょうゆ、砂糖、酒、みりんで味をつけ、煮汁が半分位になったら火を止める。

④熱いうちにすり鉢ですりつぶし、鍋にもう一度戻して火を通す。

淡白な身に骨や内臓の複雑な味が加わり、カラシがピリッと利いたこくのあるうまさである。ぬくごはんにのせて食べると思わず食がすすむ。所によってこの中にズイキを煮込んだり、唐辛子の青い葉やミカンの皮を入れたりもする。また、しょうゆの代わりにしょいの実を入れることもある。昔は暮れの忙しい時期の保存食によく作られた。

渭南地方では、ヒメイチの近縁種のヒゲイチ（本名ホウライヒメジ）を使った〝さつま〟という郷土料理がある。うろこを取って白焼きにしたものをほぐして、すり鉢ですりつぶし、みそで味をつけ、だし汁で適当にゆるめたものを飯にかけて食べる。薬味は刻みネギ。ヒゲイチの淡白な味を生かした料理である。また、須崎辺ではヒメイチをよく焼いたのをすりつぶして、生じょうゆをかけただけのタレを、あつあつの湯豆腐にタップリかけて、ふうふういって食べる、という素朴な料理がある。川村源七さんが「かなりうまいものであった」と『椀と盃』で推奨している。

（元県農林技術研究所専門研究員）



素顔の子どもたち♥第6回

『大きな学級』〔Ⅱ〕

ミニミニコンサートなど

東森　昭

学級の歌から始まった

「学級の歌なんてものがあるといいな」

つぶやくように言った私のことばで、子ども達は動き始めました。係を作って、作詩作曲。学級全員でつっつきます。

小学校の免許を持たない私は、音楽は全くだめ、楽器もつつけないし、オタマジャクシも読めないし、歌えば音痴とのこと。くやしいけど、口出しできないのです。

学級の終りの会で、毎日日直が選んだ歌を歌っていましたから、

「学級の歌ができるし、毎日歌を歌うんならいくつかの曲をみっちり練習して、全校生を招いてコンサート開けんかな」

子ども達は、後に「先生にうまくのせられた」と書くけれども、勢いこんで取り組み、全校生に案内して、昼休みの体育館でミニミニコンサート。聴衆約三百人。

「学級の歌」や輪唱、英語の歌など、ずいぶん緊張したようで、それだけにすごい自信になったようでした。

「学校中のだいたいの人が見にきて『わいわい』言っていました。すごい人気だなあ、と思いました。

教室へ帰る途中で、だれかが、

『最初の歌、音ていがくるうちょったねえ』と言っていました。けれど、まだ四年生だから、へたな歌でもいいのにと思いました。教室に帰ったら、ほっとしていました。一番良かったのは、やっぱり『あの遠い空まで（学級の歌）』でした。

きょうは、のどがつかれた感じがしました。」

県民文化ホールで歌う

五年でも、同じように学級の歌を含め、二部合唱など、子ども達自身で高度なものにしていき、チケットも配布。チケットに刷った「青い空は」の歌唱指導もしました。

六年では、とてつもなくむずかしい合唱曲の楽譜を楽器店から買い、譜面から、ピアノ、歌にしました。ほぼ六カ月かけて、ついにコンサートにこぎつけました。

また、学習など、あまり積極的でなかった男の子の独唱も入れました。

以来、何カ所かで公演もしましたし、高知市の県民文化ホールでの音楽会にも参加しました。主催者から次のような手紙をもらいました。

「…皆さんの歌を聞きながら、私は舞台の袖で、こみあげる感動と涙を押え切れませんでした。いわゆるアイドル歌手の歌や大人の歌などがまわりにいつも流れていて、その真似をしたり愛唱する子供達が多く、その姿に見慣れてしまって、いつの間にか学校の音楽と、ふだんのありのままの子供達の間で親しまれている音楽との間には、かなりの隔たりがあると感じながらも、たいして抵抗もなく受け入れている今の大人達に大きなショックを与えたと、声を大きくして申し上げたいと思います。

（中略）

誰の発案でスタートしたのか知りませんが、発案した人も、それを受けてずっと続けて取り組んでいる皆さんも、本当に素晴らしいことだと思います。（中略）クラス全員で、しかも進学という大変な時期にもかかわらず続けてきたし、また現在も続けている皆さんの合唱、指揮も伴奏も、アレンジまで自分達で工夫しているとのこと、どれ一つとっても、ただただ心嬉しいことばかりです。こんな子供達が、私の住む高知にいたとは、それが嬉しく、たのもしく、胸がいっぱいになりました。（後略）」

公演前、弁当を食べた高知公園で、もうすぐやねえ、早う済ましたい、などとつぶやきながら、しかし、緊張をかくしてハトと遊んでいる子供達を見ながら、私が全く何もできないのに、こんな素晴らしい合唱、独唱を作り上げてきた二十五人皆を抱きしめてやりたい思いに襲われたものでした。

やっぱり子ども達はすばらしい

コンサートと同じように、年1回、昼休みの体育館で朗読会も開きました。合宿の献立、買い出し、調理、その他度々の料理。開墾し、きびを作って石うすでひき、きびごはんを作るとか、竹細工、わら細工、多版多色刷りなどへの挑戦、そういう多彩な学校生活。

そんな中で、子ども達は、人間として大きく成長してきました。

体育が苦手という子も含めて、二十五人全員が、前方宙返りができました。水泳の時期は毎年耳の病気、一年から一度もプールに入らない、それが自分の分だとしていた子が、熱心に耳を治療し、五年の夏の終り、三時間ほどプールに入ったこと、五年生でかつおの刺身づくりに挑戦した子、それに刺激されて六年であじさばきに挑戦した子。

市内陸上記録会、水泳記録会でも、多く一位や十数年目の新記録など、近年にない好記録が出せました。

友達どうしでケーキを作っていてうまくいかない。高知の「ガスライト」にケーキづくりを習うよう交渉。途中で、校長先生から待ったがかかりそうになったけれども、校長先生をも説得して、ついにその願いを実現した子ども達も。もちろん、学級には絵入りの報告書と、日曜に作ったケーキがいっぱい持ち込まれ、皆でごちそうになりました。

学科の学習もその他の生活でも、この子らは、それまでに身につけたもの全てを動員し、知恵と力を精一杯発揮して、さらに新しい知恵と力を獲得していきました。まさに人間に戻ったのです。

今の子ども達は―と否定的に言われることが多いけれども、否定的な面の多い子どもにしたのは大人であり、大人が観点を返るなら、今の子ども達もすばらしい成長をしていくことを、この子らは証明してくれたと思います。

すばらしい子ども達、人間にするためには、大人が勝手に作っているあまりにもむずかしい状況はあるけれども、子ども達は、本当はとてもすばらしいものだ、と思うのです。

（南国市立日章小学校　教諭）

出版のご案内

土佐の芸能　高木啓夫著
定価四九四四円
現在、高知県下に伝わる民俗芸能を網羅。それぞれを神楽、獅子舞など十五項目に分類、詳説を施した芸能百科。

中山高陽　清水孝之著
定価三九一四円
藩政期、土佐の生んだ江戸南画の祖・中山高陽の全容を明らかにした労作。あわせて書翰集、資料集、年譜を収載。

高知県方言辞典　土居重俊　浜田数義　著
定価六一八〇円
日常何気無く使っている言葉から古語に至る土佐方言を採録、意味と成り立ちを解明した土佐言葉の集大成。

おらんくことばてんこもり　定価八二四円
方言辞典に採録した方言約一万四千語が一目で分かる、B全両面ポスター。

土佐自由民権資料集　外崎光広編
定価三〇九〇円
土佐自由民権の基本的資料を事件別に分類・収録し、原資料により各々の事件の実態が把握できるように編集した資料集。原典により民権を知ることができる。

・高知レポート1
明日を創る　大谷英二著
定価一〇三〇円
高知の〈まちづくり〉に関する17の計画書、提言を要約・解説した資料集。

・高知レポート2
いかにすれば都市の河川はよみがえるか　今井嘉彦著
定価一〇三〇円
病んでいる都市河川を回復させるための大胆な提言を、具体的な事例と資料をもとに述べた書。

・高知レポート3
土佐の自由民権運動　外崎光広著
定価一〇三〇円
従来の自由民権研究に一石を投じる画期的な著作。土佐人必読の一冊。

付方言土佐日記全訳注
土佐日記　土居重俊著
定価一八〇〇円

市制一〇〇周年記念出版
図録高知市史　高知市文化振興事業団編集
定価二五〇〇〇円

お買い求めは、市内各書店または高知市文化振興事業団まで。

ミュージカル・RYOMA劇社中はんどれっどの390日

戦い済んだ戦士たち

帆足　寿夫

恐らく皆くたくたに疲れ果てているだろう。出来れば、すべてに、もっと余裕を持って作らせてやりたかった。時間的にも精神的にも、肉体面でも金銭面でも……。

最大の原因は資金不足である。入場料収入だけではとても全経費は賄いきれない。多くの援助は確かに受けた。稽古場は高知市立養護学校、城西中学校のご好意で無料。主催の高知市文化振興事業団からは二百五十万円余の助成と職員の半専従、事務局機能など、有形無形の援助を得た。市の広報や百周年事業推進室はPR用に相当の資金を投入してくれた。又、市の職員有志からは六十万円余りのカンパも受けた。

しかし、それでも一年間の劇団運営費、制作費には届かない。チケット四千枚全完売したとしてもである。勿論それは最初から分かっていた。人件費ゼロ、スタッフ無報酬でなければ公演は成り立たない。人件費ゼロということは、劇団員が労力を提供するということを意味する。役者として出演をめざす以外にスタッフの仕事もやれ、と私は命令した。そうでなければ市民手作りなどとはいえないぞ、と脅した。これはむなしい。だから、衣装は材料代のみ、大道具もカリノ美工が大工賃なしで仕上げた。その他も推して知るべし。

劇団員は入会金と毎月の会費を納め、Tシャツを売り、自ら買い、運営費を捻出した。

肝心の稽古スケジュールはどうだったか。最初は週一回、それが週二回となり、主演者には演出の個人レッスンが加わる。さらに全員合宿四回、指名者合宿四回。いつからか自主トレを行うようになり、これが土日の二回。公演一カ月前になると歌唱とダンスの特訓も入り、殆ど連日の稽古。この合間に切符販売（動員会議）、パンフ編集会議、衣装縫製、小道具作りなどが入る。まだまだある。稽古管理作業として、演出舞監補佐、ダンスリーダー、シーンリーダーの仕事。一人何役の仕事をこなして帰宅は深夜という者も少なくなかった。全くのご苦労さんである。

それでは全員一糸乱れずであったかというと、そんなことはあり得ない。職業や家庭の用事の多い者、能力的に無理な者、気のない奴、サボる奴、途中脱落者も多いし、私が切った者もいる。泣いた者、ヒステリーを起こした者、事故を起こした者、怪我をした者、病気した者、妊娠した者、不幸のあった者、結婚した者、転職した者、全く何でもあり、何でもが起こった。

それでも、ここまで来てしまったのだ。

今年は全国的に百周年がらみのイベントばやりで、東京のイベント屋が大儲けした。芝居だって、ミュージカルだって地方の行政が金を出して買い漁った。市民への文化サービスとして悪い事では決してないが、市制を百年も施いて独自の文化がないというのは淋しい。高知市も決して例外ではない。市民として私たちの努力も足りないのだろうが、私には金を作る手腕がない。本多劇場のオーナーのように、二十年計画で、水商売で儲けて劇場を建てるといった壮大さもない。

話が少しそれた。だが、私の言いたいのは、ただ一つ、文化にもっと金をかけろ、である。折角、物を創るという芽が出たにしろ、その創り手がくたくたに疲れ果ててしまうようでは、次の段階はない。出演者にとって観客の温かい拍手は何ものにも代え難い激励だろうが、それだけでは青春の思い出づくりに終わってしまう。それでよしとするのか。

一年前までは誰一人知ることのなかった団員百人、そしてスタッフ達、ボランティアの人々。どうかこれからも物を創る作業はやめないでほしい。金がないのは苦しいが、だからといって何もしないでは情けない。金がなければ知恵が沸く。頭を使い、体を使い、世の中の形骸化と戦って貰いたい。

今、私は十一月公演の追い込みで忙しい。それが終わったら、又会おう。戦いが済んで、呆然としているだろう戦士たち!!

（ミュージカル龍馬・演出）

私の風景

せんだん並木

山脇　博之

旧国道32号線の比島～一宮街道はせんだんの並木が美しかったが、台風、道路の拡張や舗装工事などのためにその姿を消しつつあり、今、惜しまれてならない。
『こごしかる北山越えて来し国の
並木の道はせんだんの花』　富田砕花

あるアンケートによると、今の高校生・大学生の半数近くが、毎朝シャンプーをしているという。しかも男子で40パーセントを越すというから驚きである。

髪をそれほど洗ってほんとうに髪のためになるのか。頭の中身まで洗い流してしまうのではないかと心配になる。

あるメーカーがシャンプーとリンスを一つにして短時間で洗髪がすむ商品を販売してから、朝のシャンプーブームにいっそう拍車をかけた。手軽さがうけているのだ。

しかし、ただでさえ慌ただしい通学・通勤前のひとときに、いかに短時間で済むとはいえこの現象は異常である。朝食はしないが「朝シャン」はちゃんとするという。ブームとは恐ろしいものである。

今は豊かさの中でさらに快適さが求められている時代、そして現代の若者の求める快適さ、それが「かっこよさ」であり「清潔感」だという。

その証拠にここ数年、口臭防止剤、洗顔剤、男性用化粧品の類では各メーカーから次々と新製品が発売され、中・高校生を含む若い男女層を中心にその市場も急速に拡大している。

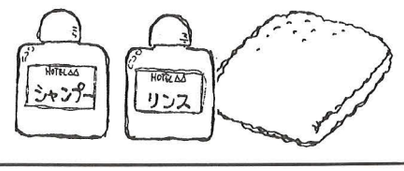
豊かさの中に快適さを求め、清潔商品が売れる。ひとりひとりが清潔に—それ自体は結構なことである。しかし、ブームとなるほど大量に使われる洗顔剤の行く末はどうだろう。

便利な合成洗剤が河川を汚濁する元凶となっているような心配はないか、少なくとも下水道の処理経費に大きなツケがまわっていることは事実である。これは税金で負担する。目先の快適さを求めることが、結果として社会的経費の拡大を生み、地球の環境を不快なものにしていないか、その辺の視点で今一度快適さというものを問い直してみたい。

髪の伸び加減で「洗髪料金」の取る、取らないを決めたお風呂屋さんの発想がなつかしい。

現代風俗を考える〈4〉

朝シャン



詩誌「兆」

「現代」を表現したい

林　嗣夫

一九六七年、学芸高校の教員有志によって『発言』というミニ雑誌が創刊された。これが現在の『兆』の前身である。ちょうどベトナム戦争がエスカレートしていた時代で、それを軸に世界が動いていた。『発言』は、教育問題を中心にすえて、エッセイや詩など、さまざまな発言をおこなった。

日本が次第に高度経済成長をなし遂げ大衆消費社会へ移行するにつれて、世の中の構造が複雑化し、不透明になり、ストレートな発言が困難な時代となってくる。そのような状況の中で『発言』を終刊し、一九七二年、『兆』というタイトルで再出発したのだった。

世界的な広がりをみせたベトナム反戦運動や全共闘運動などのあらわにした問題が、雑誌を継続させようという一つの動機となっていたことは事実である。やがて学芸高校では一教師の解雇事件が起こり、『兆』がその解雇撤回運動の一拠点ともなった。そのように、『兆』は運動体としての側面も持っていたといえる。

世の中がいわゆる「平和」になるにつれて、『兆』は詩を中心とする文芸誌の色彩を強め、同人も、東京から沖縄までの広がりをみせて今日に到っている。そして、小松弘愛の『狂泉物語』（H氏賞受賞）をはじめ、多くの詩集を世に送った。同人がそれぞれのテーマや方法で「現代」を表現したい、というのが、そのめざすところである。

連絡先　高知市薊野一二四一
四五―〇二五九（林）

俳誌「龍巻」

さらに意欲的な活動を

澤村　芳恵

昭和七年十月創刊された龍巻は、順調な歩みを続けていたが、高知市の空襲で一物も残さず消失。昭和二十年十一月、松本かをる、町田雅尚等によって復刊。昭和五十年十一月、五百号を機に主宰の松本かをるから芳翠が後事を託された。

高浜虚子、高野素十を師系とし、客観写生、省略の表現手法の俳句精神を継承。九月号で通巻六百七十三号。毎号主宰の近詠十六、七句。百草園雑記は百五十九回に達し、主宰の俳句以前の心を示す。七句出句の雑詠は厳選。同人制は設けず、誌友の一人一人は皆平等である。

句会は、龍巻主催によるもの月二回、他に各地区で句会研究会が行われ、主宰は年数回それらの句会に出席指導、或は送られてくる句会稿の選に当たっている。依岡顕知（元総理吉田茂の秘書、エッセイスト）の「素顔のワンマン宰相」と題するエッセイは、元総理の知られざる一面が軽妙洒脱な筆づかいによって綴られ好評、九月号で四十七回を数えた。

誌友による句集出版も活発で、吾川村の藪柑子句会が句集「藪柑子二」を、中西克喜指導のあかつき会が句集「あかつき」を出版。主宰がそれぞれに序文を寄せている。また寺尾是空は喜寿を記念して第二句集「不易庵日記」を上梓。その他つくし会は「つくし会第二十一作品集」を、子つくし会は「子つくし第四句集」を出し意欲的である。

連絡先　高知市上町三―九―一八
一三―八二二一（澤村）

短歌誌「高知歌人」

五〇〇号近し

田所　妙子

高知歌人は平成元年十月号で四九五号、来年の三月号で五〇〇号を迎える。

昭和二二年九月、影山聖二、安部忠三、依光亦義氏等によって発刊されたもので、四三号より田所宅に発行所が移された。以来四十年余、田所が編集兼発行人となって今日に到り、常時五〇〇名の会員を確保している。

会員は一人五首詠、他に十首詠八名、二十首詠四名があり、十月号では常山進さんの百首詠の特別作品があった。「毎月千五、六百首の短歌作品が並んでいるわけで、各自の自信作である。

巻頭言は六〇〇字内外の歌論評論を幹部の者が回り持ちで書き、一頁随想、十首選評、前月秀歌、田所妙子の短歌教室の教材、例えば与謝野晶子、若山牧水、北原白秋の歌などについての二千字内外の解説などの読物もあり、毎月四〇頁内外で内容の充実に努めている。

新入会の方は、最初の、一、二年は珊瑚集欄で勉強してもらっているが、これの批評は毎月欠かさず幹部の者が丁寧に行って新入育成に力を注いでいる。会員の歌集出版もかなりあり叢書は六三編を数えた。最近では光明院美砂、山脇稲枝、澳本利夫、田所妙子等の歌集が出版された。九月号では、田所妙子の歌集「螺旋階段」の特集号が発刊されて、県内外の著名人、幹部会員らの鑑賞批評が行われた。

連絡先　高知市新屋敷一―一〇―二五
七二―四五一八（田所）

高知センター合唱団

うたごえに夢を託して

岡村　万里

団が生まれて25年。三池安保原水禁運動高揚の60年代「うたごえは平和の力、うたは闘いとともに」を合言葉に発足。うたごえ祭典やストメーデー、うたごえ喫茶など、若き情熱を燃やした四半世紀が過ぎました。

歳移り活動スタイルも変化発展（？）しましたが、週一回のレッスン、月一回のうたごえ喫茶、年一回の定演、反核平和コンサートにほぼ定着。年々若い団員も加わり、20代から50代までの50余名、男三女七のマドンナパワーと、様々な職種と人生模様が集まる賑やかな昨今です。

五年前から取り組んでいる、手づくり草の根反核平和コンサートは、回を重ねる毎に盛況で、特に親子で参加できる〝ぞう列車よ走れ〟は今年七月の再演で百名を越すステージとなり、来年は県下にも呼び掛け二百名の大合唱をと意気込んでいます。

近々では、20回定演（11／7グリーン）

「うたって愛して25いま輝け―うたごえは平和の力生きる力」目ざして、ダンシングや日本太鼓、ポップスから「大地讃頌」まで多彩なプロに挑戦特訓中。21世紀で37歳。まだまだ未熟な私たちですが、核戦争のない平和な社会の一日も早い実現を願いながら、夢とロマンを音楽に託し、歌い続けていきたいと思います。

連絡先　高知市鴨部一五〇八鴨部ハイツ
二―六
四三―五七八七（岡村）

周囲の大変容を余所に、市の中心市街地のど真ん中に鎮座する「秋葉神社」。土佐橋から中種に入る街角の公共用地に社がある。昭和24年の中種大火で建て直されたが、〝火を治める神様〟としていまも霊験あらたかで年１回のお祀りが続いている。

風伯

図書館を郊外に

広いのは店内ばかりではない。駐車場があり、いつでも数十台がとまり、深夜にまで営業は及んでいる。つまりこれまでの高知市内中心の書店の機能、概念がすっかり変わってきたのである。げんにぼくも本探しの高知市内書店歩きから、車で帰りに郊外、郡部の書店利用も多くなった。一冊の文庫本を探しに車でかける時代である。

図書館もおそらくこういう波にさらされてくるのではあるまいか。高知市内中心部に歩いていく図書館よりも郊外に車でゆける図書館が要求されだすのも、時間の問題ではあるまいか。それに市内の図書館は収容力からみて、新刊書に押され、ほとんどパンク状態になっているのではあるまいか。

図書館も思いきって古書館、雑誌館といったたぐいの独立館を郊外に考えていいのではないか。それを専門館として充実させていくとき、全国的にも注目されるはずである。戦後初期の本などすでに手に入りにくい。文化とはこれらを保存していく力のことではあるまいか。郊外にゆったりした独立館ができるとき、それは自由民権記念館と並ぶ高知の誇るべき財産になるのではないか。（睦）

さいきん郊外のあちこち、郡部のあちこちに大きな書店がふえた。レンタルビデオ店も兼ねているが、広い空間に高知市内の書店以上の本が並び、たいていの本は間に合うようになった。新刊とともに岩波文庫や新書もあり、従来の田舎本屋とはすっかり変わってきた。

第6回高知市都市美デザイン賞 推選募集

事業団では、新しくできた建築物、築造物を市民の方々から推薦して頂き〝都市美の創造、文化的・芸術的環境の形成、良好な町並みの形成、地域のシンボル性〟等の点を選考基準にして「高知市都市美デザイン賞」をおくっています。あなたの感性にかなう建築物を推薦して下さい。

●推薦の対象

昭和64年1月1日～平成元年12月31日の間に高知市内で完工した建築物・築造物。

●推薦の方法

どなたでも推薦できます。葉書に次の事項と、住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記してお送り下さい。葉書1通につき推薦は1件とします。

①建築物、築造物の名称
②所在地
③完成時期
④推薦の理由

●送り先、問い合わせ先

〒780　高知市本町5－2－3
(財)高知市文化振興事業団
「高知市都市美デザイン賞」係
電話0888－73－4365

なお推薦して頂いた方の中から抽選で20名の方に記念品を贈呈致します。

●受付期間

平成元年12月1日(金)から2年1月31日(水)（当日消印有効）まで。

●表彰

特賞1点　入賞2点

声優　巌　金四郎氏を迎えて

朗読を楽しむ　朗読公開講座

◇日　時　11月19日(日)午後1時～4時
◇場　所　高知市潮江市民図書館3階会議室
◇受講料　1,000円（テキスト代を含む。当日、会場で）
◇定　員　先着100名（実技指導希望の方は20名）
◇申　込　電話またはハガキで文化振興事業団へ。

内容

- 朗読の事例発表
- 公開実技指導20名
  テキスト　宮沢賢二
  「注文の多い料理店」
- 模範朗読「花咲山」

高知を撮る

第6回高知の映像コンテスト

〈テーマ〉　高知
記録性を持った古い写真から現代のものまで可。

〈応募要領〉
◎応募資格は、撮影者または著作権保持者に限る。
◎作品は4ツ切以上、発泡スチロールパネル貼りとする。組写真は3枚組までとする。
（ただし、古い写真はこの限りにあらず）
◎作品一枚ごとに、裏面に応募票を貼りつけること。

〈賞〉特選2点・準特選15点・入選100点（特選・準特選については原版・著作権は主催者に属するものとする。）

〈受付〉1月10日(水)～2月20日(火)・郵送の場合20日必着。

〈入賞作品展〉　3月中旬

作品募集
くわしくは事業団まで
TEL73－4365

財団法人　高知市文化振興事業団
〒780　高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島8－14869